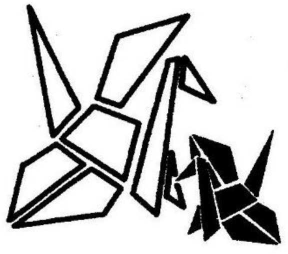
1995年

緑区民の戦時体験記録集（第二集）



名古屋市緑社会教育センター

第7回戦争体験を語り継ぐ集い

目次

戦時中の想い出……（服部ひで）……2

兵隊へ行く前の助教生活……（池田陸介）……4

シベリアの凍土に埋めた戦友を　戦後四十九年目発掘遺骨を遺族へ……（橋詰四郎）……6

平和な世界の尊さを強く訴える……（吉田ふき）……9

鳴海の空襲……（鈴木　修）……11

戦争の記憶……（伊藤貴代子）……13

つらかった集団疎開……（馬場勝幸）……16

戦争と私……（野竹智恵子）……19

あの頃を回想して……（大塚君子）……22

戦時体験記録集（第二集）発行の辞……25

戦時中の想い出

服部　ひで

昭和六年満州事変、十二年日中戦争、十六年太平洋戦争と、みんな私の学生時代です。その想い出と云っても話が交錯してしまっていますのでお許し下さい。高学年頃から出征兵士を駅まで日の丸で送り、又ある時は兵隊さんの遺骨をむかえるという事が度重なりました。

その頃の世界地図は、日本列島、朝鮮半島、台湾、樺太が赤色、満州国がピンク色、そのピンク色がいつかは赤になると教えられました。

そして金属類の供出、大きな物はお寺の釣鐘、小さなものは家庭用品の火鉢や蚊帳の釣輪まで…何になったのでしょうか。

物資は殆ど配給、食料品はもちろん、衣服まで点数でした。お米は本当に少しで代用食にサツマ芋、馬鈴薯、脱脂豆粕、マーガリン等、メリケン粉等も少ししかなく本当に粗雑なものでした。その為買出しに田舎へ出かけた人達も憲兵にみつけられて、よく取り上げられたと聞きました。みんなおなかをすかせていたのです。

都会では学童は田舎のお寺などへ疎開させ、殆どいませんでした。

その頃の服装は、男は国防色の洋服に戦闘帽をかぶり、ゲートル姿、女はモンペで胸には住所・氏名・血液型を書いた布を縫いつけ、防空頭巾と非常袋はしっかり肩からかけていました。そして竹槍の稽古、バケツリレーで消火訓練等盛んにやったものです。

昭和十九年末頃から空襲が激しくなりました。大本営発表御前崎南方洋上を…と情報の入る頃、B29は既に堂々たる大編隊で名古屋の上空に入っているわけです。爆弾、焼夷弾と、大きな会社、工場はもちろん各家庭にまで。会社、工場ではたくさんの死者を出し、各家庭では焼夷弾で焼失する家、油脂焼夷弾のメラメラとヘバ

リツイテ燃え上がるのは消火するのに本当に大変でした。バケツリレー等は役に立ちません。一人で一ケ所二ケ所も消さなくてはなりませんでしたから。燃え尽くしてしまった隣組の家、呆然とした夜明けを迎えた事も忘れられません。

その頃、妊婦疎開等も有りまして、私も故郷の牧之原へ行きました。そこは海軍予科練航空隊の飛行場の近くでしたので、艦載機の空襲です。尾翼をフリフリ急降下し乍ら機銃操射をしてくるのです。夜ともなれば照明弾を落とし、昼同様の明るさにするのです。でも艦砲射撃まではありませんでしたが、夜は北向きの山の斜面にむしろを敷き、蚊帳をつって何日か寝ました。今ここは緑したたる牧之原大茶園です。

二十年八月、広島、長崎に原子爆弾が投下され、たくさんの犠牲者を出し、十五日御詔勅があり、終戦を迎えました。この日は朝からとても暑く、不気味に静かで敵機が一機だけ通りすぎ空襲警報も出ませんでした。三人の息子さんを戦地に送られていたお父様が大変憤慨していました。今はみんな亡き人です。

二十二年、私達はこの有松裏の社宅に入居しました。ここは元アメリカ兵の捕虜収容所だった所です。木造の長屋が何棟かありました。ここに住み憲兵に監視され乍ら、有松駅から電車に乗り、熱田の日本車輌まで仕事に通ったと聞きます。その人達もきっと悲しかったでしょう。終戦になり、この収容所には本国からの慰問袋でお菓子等が投下されたと聞きます。ここも今は公務員住宅、日本車輌の社宅と、立派に出来ています。今想えば信じられない様な変わり方です。戦後五十年すぎ本当に恵まれた今の世の中、幸せ一杯です。

若くして戦争のため命を落としたたくさんの人達の御冥福を心よりお祈りし、いつまでもこの平和の続く事を願って居ります。

兵隊へ行く前の助教生活

池田　陸介

私は兵隊に行く前、昭和十九年四月から四カ月、知多郡大高町立大高国民学校へ、助教として勤めていました。当時の青年は、誰もが天皇陛下・国のために戦争に行って死ぬのが当り前と思っていました。死んでくるならば、その前にこの世で一番いい仕事として、教師の道を選んだのです。

私のこの願いは、近所の名和国民学校の校長先生である神谷種次先生へ頼んで、実現しました。若い男の先生がほしいという、大高国民学校の石川照治先生に、紹介して下さったのです。面接だけで、今の様な試験はありません。乙と丙ばかり（当時の成績は甲乙丙丁で評価された。丁は落第）の成績表を、校長先生に手渡す時は、恥ずかしくて顔が上げられませんでした。劣等生の私に「あすから来て下さい」と採用して下さったのです。その時の嬉しい緊張した気持ちはおぼえています。

当時の大高国民学校は分校（現大高北小学校）と、本校（現大高小学校）に分かれ、分校には、女子青年学校と、一・二・三年生がいました。私は、そこの二年生竹組四十三人の助教になったのです。もう死んでもいいという職につけた訳けです。嬉しくて、家を六時半に出て、ガタガタ道を全速で十五分の街道を自転車で走り、校舎の入口の重い戸を開けました。時々宿直の先生に会い、迷惑だったと思いますが、当時の私は、そんなことを考える余裕はありませんでした。教室の窓を開けて子どもを待つ、これは分校主任の本間先生に教えてもらったことです。授業のやり方は、本間先生直々に授業を、算数・読み方・修身とやってもらっておぼえました。その時、いい教師になるには、童話のやれる先生になりなさいと言われました。私の最初の授業は、子どもの顔が見えませんでした。うわづって、あがってしまったのでしょう。当時の子どもは、行儀がよくて、しゃべったり、外を見たりしている生徒はめったにいませんでした。私の下手な授業にはついてこれず、時々外をのぞいている

小さな頭をポカリやった記憶しかありません。

昭和十八年でしたか、文部省推薦図書、平野婦美子著『女教師の記録』が出版されました。栄町の丸善で本間先生に買って来てもらい、四カ月間の私の先生役をはたしてくれました。私の教師としての土台を作ってくれた本です。ポケットに、ちり紙・鼻緒・メンソレーを入れておく。バリカン・爪切りは手元においておく。毎日日記を書かす。自然観察記録をつける。日記はその日に見て、赤ペンで返事を書く。休んだ生徒にはその日に見舞いに行く――これは子どもが可愛いく、子どもと共に成長する人間でなければできないこと、まさに聖職であると思いました。この平野婦美子先生は、赤教師として学校を辞めさせられ、図書は、文部省推薦の取り消しを受けました。今も、こういう教育をすると、赤教師と呼ばれる状況は、残っているようです。

助教師仲間に坂野紀三男がいて、ゲーテの本を手離さず、師範学校生であった久野広信は暇があると、分校へ来て人生を語ってくれました。兵隊へ行く前の四ケ月は、この二人からものを学ぶことばかりでした。子ども等との出合いを重ねて、今の私を作ってくれた貴重な時期でした。分校は主任の本間先生と私だけが男子で、あと十名近くは女教師で、机上には花が挿され、放課ごとにお茶を出され、時には女子青年学校生の抹茶の接待を受けることもありました。こんな世界は始めてで、唯々恐れ入っていました。女教員長は「あなたは礼儀正しい人ですね」とほめてくれましたが、行儀よくして、まわりによく思われて兵隊に行くという思いが、いつも私を縛っていたようです。本校では、高学年は木銃（カシの木で銃に似せて作ってある）、竹槍訓練・麦刈り・畑作業等で、教師はとても緊張していたようです。その点、分校は子どもと遊んだ記憶だけが強く残っています。私の助教生活は、春爛漫そのもので、死を意識して選んだ教員生活でしたが、あとの天皇陛下・国の為に命を投げ出す馬鹿らしさを根底から見直す、大変重要な時期でした。昭和十九年八月三十一日四十名近くの竹組の子と、坂野・久野・数名の母親達に見送られて、愛電名和駅を出発し、翌日名古屋の高射砲隊へ入営しました。

シベリアの凍土に埋めた戦友を
戦後四十九年目発掘遺骨を遺族へ

橋詰　四郎

今年の五月二十七日私は舞鶴にいました。シベリアから生還した人達が祖国への第一歩を踏んだ桟橋が復元したからです。募金活動で二千六百万円集め完成しました。その時「私のお父さんはシベリアの何処で、どのような死に方をして、何処に埋められているのですか？教えて下さい。」と、言う人が二人もいました。平和な日本でまだまだ戦争を引きずって生きている人が大勢います。

戦争、子どもと一緒に考えて下されば嬉しいです。

この文章は、昨年度、緑区民『第六回戦争体験を語り継ぐ集い』の拙文を締めくくった箇所です。父を捜す二人の内の一人、山本美智子（五十三才・京都市）の話しをしたいと思います。彼女は父の顔も、父への思い出も一切ありません。彼女が一才八カ月の昭和十九年、父、山本治は天皇の命令で、二十三才の妻と美智子との仲を引き裂かれ、満洲へ応召（軍隊に入ること）、山本の年齢は二十八才でした。

美智子は母が毎朝、父の写真に食べ物を供えているのを見て成長し、それは『陰膳』（戦争に行った人の家族が無事を祈る行為）と教えられました。

シベリアでは酷寒・飢餓・重労働・疫病で六万とも七万とも云われる人が死に、昭和三十三年引揚げは終わりましたが、山本治は帰って来ませんでした。それどころか、引揚者から山本治の死を厚生省に伝える人が現れ、ある人は、昭和二十一年一月十五日、別の人は二月十二日、更に別の人は二月十四日だと。それはシベリアで毎日大勢の人が死んで行った混乱さを思わせるもので、美智子の母は、真ん中の日を命日に決めました。昭和五十七年、六十一才で美智子の母は、二十三才で別れた夫の元へ旅立ち、母の骨を墓に納めた美智子は、この墓には

父の骨が入っていない、死んでも一緒になれない戦争を呪い、それから美智子の父捜しが始まりました。

昨年五月、私達シベリア生還者が待ち望んだ桟橋が復元し、上陸の再現に船から桟橋へ。一方桟橋では、引揚者の名前を大きく書いた幟を持って当時を再現するため、私達は、シベリアで死んだ戦友の名前を書き、魂だけでも迎えようと準備し、美智子にはお父さんの写真を大きく伸ばし「幟」も持って桟橋に立つように伝えました。乗船希望者が多いので抽選で六十名を決め、その中に静岡県松崎町の須田がいました。船から桟橋を見ると「山本治」の幟が目に入り上陸するなり、俺は山本をシベリア、アラチカ炭鉱で埋めてきたと言い、写真を見せると「間違いない」と証言しました。（上陸はマスコミの要請で三回繰返し、私は記録係で桟橋のそばに特設された櫓の上で、マスコミと一緒にビデオ撮影し、『舞鶴たいら桟橋復原式典』を制作した。）

その時、須田の年齢は十七才軍人でなく、満蒙開拓青少年義勇軍（農地の少ない小作農家の子どもを集め、侵略した国の土地をあげるからと、農業をさせた制度）の一人でした。（※註：ソ連は兵隊の他、一般人や子どもまで強制連行したのです。）

私達は七月十九日から八月九日まで『凍土に眠るシベリア鎮魂墓参』を企画し参加するメンバーも決っていたので、須田に埋葬場所と埋葬図を書かせ、墓参者の一人、望月（富士市）に持たせました。須田が言うには、山本は病死で「祈る武運長久・山本治君」と墨で書いてある「千人針」（無事に帰れるようにと千人の女性が、祈りをこめて一針一針糸を絞った布）を寒かろうと、お腹に巻いて埋めたとも図解で説明しました。

七月二十九日、望月はアラチカで須田の書いた図面の場所を掘ると遺体があり、遺体には図解通りに千人針があり、一目で山本に出合えたと言い、須田の記憶力の抜群さに驚いたと言っています。十七才の少年が六十六才の今も、鮮明に脳裏に焼付いている地獄絵図の体験であったのです。

京都のお盆の準備は、大文字山の薪並べで始まります。美智子はそれに合わせて、亡き母に習った父の五十回

目のお盆の支度を始めました。私達はお盆前に、遺骨をお渡し出来ることだけで喜んでいました。「大文字さん（お盆）に間に合ってよかったですね。」と、言った私に、「昭和十九年兵隊に取られて、五十年目のお盆を前に遺骨が帰ってきました。このお盆は私達遺族にとって父の初盆です。」と泣き崩れました。美智子の母思いと見知らぬ父を恋う一心が、シベリアから父の骨をお盆を前に母の墓へ呼び戻しました。私は美智子が「父の初盆です」と言ったのを聞いて、彼女が「父の五十回忌」を法要するまで生き続けてほしいと、願わずにはいられませんでした。

平和な世界の尊さを強く訴える

吉田　ふき

五十年前の軍国主義一色の日本は、殆どの若者（十三才～十九才）が、誇りを持って特攻隊、予科練、学徒出陣等、報国精神の渦中にあった。昭和十八年より病院勤務の私には、現代の人には絶対想像できない毎日が続いた。「入院患者、外来患者」外来の午前の部が終了するのが午後三時、その後に入院患者の処置にむかい、午後六時から九時半までまた外来…の毎日。お休みは、一ヶ月二回である。

・空襲警報＝B29襲来、防空壕避難、爆弾投下、ゴオー、ダダダー。
　爆弾投下量全国十四万七千トン、愛知県は二万トン。全国最多である。
・灯火管制＝絶対に灯火が漏れないよう、黒幕を覆う、二重、三重に。
・非常召集＝医師、看護婦はトラックに乗り被災地に赴く。常時、着のみ着のままで、何時でも対応の体制。

被災者の治療は、小学校や寺院等で。艦砲射撃の現場は死体の山。現地の行動は、一切口外してはいけない。

・食糧難＝生活物資はすべて配給。毎日、空腹での勤務。上野動物園も閉鎖、処分された。
・召集令状＝突然、赤紙一枚にて、約一週間後に軍隊へ入隊。

昭和二十年三月には、米軍機三百機の爆撃があり、焼夷弾が投下され、十万人の犠牲者がでた。

昭和二十年八月十五日には、玉音放送。病院の従業員は一斉に拝聴するも、意味不明。院長より、終戦の旨が知らされた。

終戦と同時に殆ど職場がなくなったが、医療従事者のみが従前通りであった。現今では、3K職場と敬遠されるに至ったが、当時は最高に思い込んでいた。昭和五十八年の定年退職まで、夢の間に健康に恵まれ、誇りを持っ

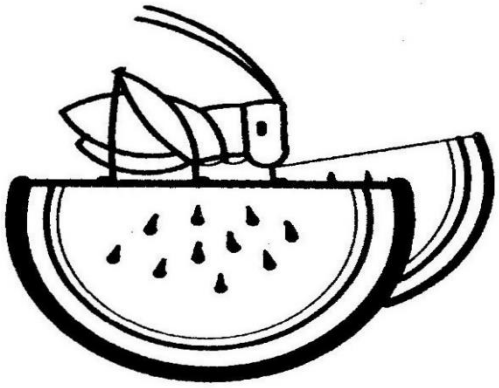
て務めた。

現在の平和に感謝して、深刻化する高齢化社会の中で精一杯悔いのない毎日を送りたいと思っている。

多数の犠牲者のご冥福をお祈りします。

職歴

・昭和二十三年：看護婦検定試験合格
・昭和二十四年：助産婦検定試験合格
・昭和二十五年：第2回看護婦国家試験合格



鳴海の空襲

鈴木　修

中学一年の時だった。昭和十九年（1944）。学校の授業はなく、全員、動員先の工場で武器生産に携わる毎日だった。私は航空機製造のプレス加工部門にいた。ジュラルミンの板を作業指示票に従って一定の角度に折り曲げる単純な作業だった。一日百枚、二百枚と曲げた。噂では戦闘機「ゼロ戦」の尾翼の一部らしいということだったが、軍事機密とかで最後まで何であるか知らされることはなかった。

最初の米機の空襲は、動員先の工場で働いている最中であった。帰りの電車が動かない。仕方がないから、名古屋から鳴海まで歩いて帰った。敵機の来襲を警戒して、夜は電燈の光が家の外に漏れないようにしていたから、真っ暗である。家の近くへきて、一軒、家が潰れているのに気がついたが、それが爆弾によるものであるかどうか不明だった。

家に帰って、はじめて鳴海が爆撃を受けたことを知った。母親は爆撃のショックで、防空壕の中に寝たままだった。父は「たたきつけるようなすごい音だったで、腰が抜けてしまったんだわ。」と声を震わせた。

翌朝、庭にでてみると、わが家のものでない鉢植えが無数に落ちていた。

「徹三さんとこから飛んできたんだわ。」と父親はいった。徹三さんの家は、わが家から五十メートルほど離れていて、周囲を低い土塀で囲んだ旧家である。爆弾は土塀の中に落ちたらしい。

「土塀のおかげで、この程度ですんだ。ほれ、屋根を見てみよ。植木が幾鉢もささっとるだろ。みんな徹三さんのとこのもんだわ。徹三さんには悪いが、土塀の中に落ちたで被害がこの程度ですんだ。」

日頃、口数の少ない父親だったが、このときは多弁だった。初めて体験した爆撃のショックからだろう。

爆弾が落ちたのは、徹三さんのところばかりではなく、昨夜、暗闇越しに見た潰れた家も、爆弾でやられたも

のだった。二階建ての大きな農家だったが、ぺちゃんこに潰れて、見る陰もなかった。小学校の時の友人の家だった。後から知ったが、鳴海小学校の裏手にあった一軒屋も直撃を受け、一家全員が死んだし、同じ字の中の寺の裏手の家もやはり直撃を受け、家人が幾人か亡くなった。

軍需工場ならまだしも、民家を爆撃するとは、まさに無差別爆撃じゃないか。これが"鬼畜米英"の正体なのか、とひとり敵意を燃やしたのを今も覚えている。鬼畜米英とは、国民の戦意を掻き立てるために、軍部が敵国米英に対して与えた蔑称であった。

この爆撃の折、天白川沿いの田圃に、かなりの爆弾が投下されたのを知ったのは、それから数日後だったろうか。いま汚水処理場があるところから、旧東海道を挟んでゴミ焼却場がある一帯は、見晴るかす田圃になっていて、家は一軒もなく、そこに爆弾が何発も投下された。投下場所は、直径四、五十メートルの巨大な穴になって、戦争が終わっても埋められることはなく、稲が育つと、丸い巨大な池になって、戦争の傷跡となった。

名古屋の空襲年史に当たってみると、このときの空襲は、名古屋空襲初期の、大曽根の三菱発動機が集中爆撃を受けた時に相当し、大人たちが、当時「(鳴海の爆撃は)三菱爆撃の行きがけの駄賃にしたもの」だとか「三菱の爆撃を終え、なお残っていた爆弾をついでに落としていったものだ」としたり顔に話していたのを思い出す。混乱の中で人々は意外と冷静に状況を把握していたのだろうか。

ともかくこれが鳴海の最初で最後の爆撃であった。

名古屋の空襲で、最も凄絶を極めたのは、昭和二十年六月七日早朝の船方の愛知時計、熱田発動機、愛知航空機の三工場の爆撃で、死者二千七百余人をだしたが、なぜか私はこの時、家にいて、西の空に巨大な黒煙が吹き上がるのを体をふるわせながら眺めていた。

戦争の記憶

伊藤貴代子

私は今五十九歳。今から五十一年前、当時国民学校三年生(満八歳五カ月)だった私は、国の方針で「学童疎開(がくどうそかい)」を経験しました。確か昭和十九年八月頃だったと思います。

まるで遠足気分で疎開先の江南のお寺に着いたのですが、午後からものすごい夕立となり、雨と雷で恐ろしく心細く、一人二人と泣き出し、ついに全員で涙の大合唱…引率の先生方を困らせました。

疎開先の生活は、午前中授業、午後は小川で洗濯、お風呂は三〜四週間に一回位町の銭湯へ出掛けて行きました。当時はセッケンもなくお風呂の湯も不潔で、当然髪の毛とか体にたくさんシラミもつきました。それよりも一番つらかったことは、慢性的空腹感でした。 時折近くのたんぼへイナゴを捕りに行き食料にしたり、農家で桑の木の皮むきを手伝ってあられ(おもちを小さく切って干したものを火であぶったもの)を頂いたりすることがあり、とてもうれしく思いました。

また、数カ月に一度親の面会があり、少しのビスケットやゆで卵、あめ玉など持って来てくれるのが嬉しく、規則で何も食べさせないようと言われていたとかで、先生方とか友人たちから隠れて食べた記憶があります。面会の翌日には決まって脱走する友人がありました。名古屋まではあまり遠くないので、線路づたいに歩いて親元へ帰るのです。親から連絡があればよいのですが、時々行方不明の学童もいて、遅くまで先生方が連絡を取ったり探したり、とても大変でした。

やがて十九年も終わり頃、戦争も日本に不利となり、名古屋の上空にもB29(重爆撃機)が飛来して来るようになり、私たちの疎開先も安全ではなくなりました。雨が降っている夜半、先生方に起こされ学校内の防空壕の中に逃げ込み、水につかりながら空襲(くうしゅう)の終わるのを待ったこともありました。

二十年のお正月、きれいな服もごちそうもありませんでしたが、和尚さんが一人づつに砂糖漬けの野菜のお菓子でお抹茶をたててくださった一時、子どもながらに改まった気持ちでした。

正月過ぎ、いよいよ空襲が激しくなってきました。最初はＢ２９で、軍の基地とか軍需工場の建物への爆弾投下が主でしたが、焼夷弾（しょういだん＝六角の筒に石油と火薬を詰めて何十本まとめたもの）が開発され、一般の家もターッゲットとなりました。

私の家も中川区で工場をしていましたが、三月十二日の名古屋空襲ですっかり焼けてしまいました。その夜は名古屋の空が真っ赤で、時折ちらちらと光が舞いとてもきれいに見えました。数日後母から連絡が入り、「何も残っていなかった」と聞かされたとき、大事なおひなさまも燃えてしまったのだと初めて分かり、とても悲しかったことを覚えています。

それからしばらく後、四月だったと思います。母の疎開先へ移ることになりました。今度は縁故疎開です。ますます空襲は激しくなり、ラジオからひっきりなしに東海軍管区情報「ただ今敵機が尾鷲上空から名古屋方面へ進攻中」と放送していました。時折近くの基地から上空の飛行機に向かって高射砲（こうしゃほう）が発射されていましたが、ほとんど当たらなかったと思います。

そして昭和二十年の八月のはじめ、その日も空襲警報があり、午後一時頃解除になったので、近所の友人五～六人で川へ遊びに行きました。飛行音がするので見渡すと、川の下流方向から低空飛行で艦載機（かんさいき）がこちらへ向かって来るではありませんか。あわてて橋の下へ隠れたのですが、あっと言う間に飛行士のゴーグルをはめた顔まで見えるほど接近し、ババババヒューン！と機関銃（きかんじゅう）を撃ってきました。時間が止まったような一瞬でした。幸い誰もけがはありませんでしたが、橋のうえには数個の穴が空いていました。母

はその時川の方で飛行音と機銃掃射（きじゅうそうしゃ）の音がしたので「もうだめだ」と思ったそうです。あの時の母の血の気の失せた顔を今でもはっきりと覚えています。

そして八月十五日、風ひとつない暑い日でした。「早く家へ帰って家の人と天皇陛下のお話しを聞くように」と、校長先生に言われ帰ると、近所の人達と父母がラジオを囲んでいました。雑音の多いラジオから天皇の言葉が切れ切れに聞こえてきました。四年生だった私はもちろん大人の人達も何のことだかはっきりと分かりませんでした。放送が終わってしばらく無言が続いた後、「一体何だったんだろう？」「しのびがたきをしのびと言葉があったから降伏（こうふく）したんだと思うよ」とか、わいわい言っていました。翌日の新聞ではっきりと終戦とわかりました。

子どもだった私たちは単純に「空襲が無いでいいがね」程度の気持ちでしたが、大人たちはいろいろうわさが流れて不安な気分だったと思います。九月頃に名古屋に帰りましたが、借りた家も近所に爆弾が落ちて壁土が落ち、天井から一部空が見えていました。道路には大きな穴がいくつも空いていました。それからは食料の無い大変な時期を迎えました。

小学校三～四年頃ですからあいまいな点もあると思いますが、これが私の戦争の記憶です。あのような事は子ども達にあわせることが無いようにと、心から平和が続くよう念じます。

つらかった集団疎開（しゅうだんそかい）

馬場勝幸

昭和十九年八月十一日、名古屋市立高松国民学校の学童が疎開のため、名古屋を後に、濃尾平野を北へ向かった。名鉄新一宮駅で今は廃線となっている起線のチンチン電車三両に分乗し、終点の「起」へ到着した。沢山の地元の学童や町民の歓迎を受け、その日から愛知県中島郡起町（現在の尾西市）の各寺院等に分宿して生活することになった。

私は5年生、妹四年生で、町内別に生活することになり、淋しさは一応和らげられたが、親元を離れたことの無い小さな子ども達が暮らすのは大変な事でした。遠足気分で着いた起の町、名古屋市電、名鉄電車と乗り継いで、見ず知らずの地に着いたころは楽しさでいっぱいでした。しかし日が経つにしたがって心細くなり、小さな児童たちはホームシックになり、一日中泣く子もありました。

戦況（せんきょう）が悪化して食料事情が思わしくないため、雑炊やおかゆが食卓に出るようになり、地元の子ども達とのケンカではいつも決まって「ヤーイヤーイ　オキャー坊主」と言われる羽目になってしまいました。

秋が深まるにつれ、稲穂が頭を垂れるころ、寮から少し離れたたんぼにイナゴ捕りに出掛けます。寮母さんに串の作り方、イナゴの焼き方を習い、みんな喜んで捕りました。食べ盛りの私たちの空腹を満たす恰好なおやつの代用として大変喜ばれました。

しかしつらい生活の中で一番の楽しみは、はるばる名古屋より肉親の面会があることです。今思うと物のない時代に苦労して調達したであろうお菓子をたくさん持って、両親と兄が面会に寮を訪れたときは、涙がいっぱいで、その夜は興奮のあまり寝つかれませんでした。また事情があって面会に来られない子どもにとっては全くか

わいそうなものでした。

冬になると日課のひとつで、暖かい縁側で、ノミやシラミとりが一斉に始まります。家にいたときには見たこともないノミやシラミです。

お寺という所は気味が悪く、暗いところで夜になるとなおさらいやな所です。疎開児童が一度に大勢お世話になったのだから、トイレが足りなく、境内の横の、しかもお墓の中にトイレが作られましたので、夜中に一人ではとても用足しに行くのが怖く、本堂の階段からやってしまったものです。風呂も寺には無く、町の銭湯へ整列して通いました。町民が入浴する前に利用させていただくものですから、湯をぬるくしてはいけない、セッケンを使うと湯が汚れる、ということで熱い風呂に我慢して飛び込んだものでした。

この年昭和十九年十二月七日の午後一時半頃、本堂の廊下で勉強いしていたところ、大きな地震が起こり、素足のまま本堂前の庭へ飛び出しました。本堂が左右にものすごく揺れ、怖かったものです。幸い児童達に怪我は無く、翌日はいつもの通り列を組んで学校へ行きました。この頃は今の子どもと違い、歌う歌は軍歌ばかりでした。軍歌ばかりの中でも確か題名が「お山の杉の子」という歌をよく歌って通ったものでした。

昭和二十年の正月にはおせち料理が出たかは記憶にありませんが、お雑煮が出ました。六年生が受験準備のため、名古屋へ帰ってからは私たち五年生が中心になり、小さい子ども達の面倒を見ることになりました。また町内の出生兵士を送る日には、最上級生として、朝の早い眠いうちに起こされ、先生に連れられ見送りに行きました。スルメやコブがもらえるのが唯一の楽しみでした。

当時は夢や希望を持てる状況ではなく、何事も「お国のため」という事が第一で、またそのような教育をされたのです。勉強をしたという記憶はあまり無く、もっぱら空腹を満たす事ばかり考えていたように思っております。他の寮への使いの帰り、たんぼ道をリヤカーを引いて歩いている時、上空をB29の大編隊が名古屋へ向かっ

ていました。翌日二〜三名の児童が先生に呼ばれ、悲しい知らせを受けました。私たちの学校も空襲を受けて消失してしまいました。昭和二十年十一月八日その焼け跡へ集団疎開の学童が全員そろって帰り着くことができました。

戦争と私

野竹智恵子

もう五十年前の話になるのですね。今でも防空壕（ぼうくうごう）の中で、身を固くして爆弾の落ちる音と地響きにおびえながら、敵機（てっき）の去るのを待つしかできなかった、あの恐ろしい瞬間を忘れることができません。

昭和十六年十二月八日、真珠湾攻撃（しんじゅわんこうげき）とともに日本は米英に宣戦布告（せんせんふこく）をし、大東亜戦争（だいとうあせんそう）が始まりました。「ぜいたくは敵だ」「欲しがりません勝つまでは」のスローガンのもとに、当時女学校の四年生だった私は男手のなくなった農家に手伝いに行ったり、軍需工場へ働きに行ったりで勉強どころではなくなりました。戦地の兵隊さんに慰問（いもん）文や慰問袋を送ったり、千人針（せんにんばり）を縫ったり、銃後（じゅうご）の女性として戦争に協力していました。しかし初めのうちは大本営（だいほんえい）発表で「どこそこを占領した」と勢いがよかったのですが、だんだん戦況が悪くなったようで、昭和十九年の終わり頃から軍需工場をねらってB29の爆撃が始まりだしたのです。

昭和二十年に入ると、空襲警報（くうしゅうけいほう）が度々発令されるようになりました。警報とともに防空壕に入って、敵機の去るのをびくびくしながら待つという事が多くなってきました。防空壕と言っても父が自宅の裏庭に畳み一畳分ほどの穴を掘り、材木やとたんで屋根をし、上に土を盛った程度のちゃちなものでした。工場に爆弾を落とすのか地響きがして、全く生きた心地がしませんでした。警報解除とともにほっとして家に入って行くのですが、今思ってもその壕に直撃を受ければ助からなかっただろうと思うと、ぞっとします。

そのころもう芦屋市の小学校に努めていたのですが、通勤途中に敵機（航空母艦から飛んでくる艦載機）が襲来すると電車は止まって乗客はクモの子を散らすように逃げるのです。機銃掃射（きじゅうそうしゃ）で狙われ

るからです。学校で授業をしていても警戒警報が発令されると子ども達を家まで走って帰らせました。

戦局はますます厳しくなり、本土決戦（ほんどけっせん）に備えて竹槍訓練や防火訓練（火を消すために防火水槽の水を町内の人がバケツリレーをしたり、火たたき棒で火をたたいて消す）をしました。今から思えばこっけいな風景ですが、みんな真剣でした。

とうとう敵機が神戸の街をねらってやって来ました。五月十一日だったと思います。朝食をすませ、父は会社に出勤し私も学校へ出勤しようと用意をしていましたら、警戒警報が発令され、すぐに空襲警報が発令されたのです。B29の重苦しい轟音が聞こえたと思ったら、火のかたまりがあっと言う間に壕の周りに点々と飛び散って燃え始めています。油脂焼夷弾（ゆししょういだん）です。一つ二つはたたいて消してみましたがとても間に合いません。こわくなって母と毛布をかぶって体一つで逃げ始めました。あたりは真っ暗で、道にはちょろちょろと油脂が燃えています。家々が燃え始め、被っていた毛布の裾の方が燃えだすのをたたいて消しながら、とにかく近くの青谷川まで行きましたが、これが失敗でした。川筋を熱風が吹き抜け、誰かが置き去りにした荷物が燃えながら転がって来ます。もうだめかと思っていた時、川の橋げたの影になって所に防空壕がありました。頼んで母と二人で入れてもらいました。それで助かったのです。地獄に仏とはこんなことを言うのでしょうか。

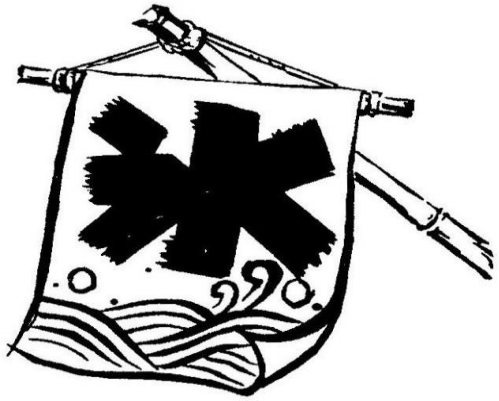
どのくらい時間がたったのかなんとなく静かになったので外へ出ました。全く焼け野原になっていました。我が家もがれきの山になっていて、ぷすぷすと煙が出ていました。かわいそうに庭で飼っていたにわとりが焼け死んでいました。呆然と焼け跡にたたずんでいましたが、煙りに目をやられ涙が出てとまりませんでした。そのうちに父が会社から無事に帰って来、親類のものも集まってお互いの無事を確かめ合いました。みんな家を焼かれていました。ずっと書き続けていた日記もアルバムも、一切焼けてしまって灰になってしまったのです。その晩は近くの小学校に避難し、トウモロコシの混じったおにぎりを食べ、講堂の床にもらった毛布で疲れ切った体を

休めました。

翌日焼け跡に戻り、がれきの中から茶碗などの瀬戸物とバケツなどを拾い集め、それを持ってとにかく私の勤務先である芦屋の岩園小学校に行くことにしました。他の親類の人達は故郷である鳥取に戻り、みんなばらばらになってしまいました。

阪急電鉄の西灘駅のホームは焼け落ちて不通でしたので、線路づたいにとぼとぼ御影駅まで歩きました。途中で真っ黒焦げになった人々を何度か見て胸が痛みました。やっと芦屋に着き学校の家庭科室に二～三日お世話になり、その間に学区内の空き家に住まわせていただくことになり、親子三人やっと何も無いながらも落ち着いた生活を送ることができるようになりました。二十歳の時の事でした。

今平和のありがたさをかみしめていますが、同じ地球上で戦争が絶えずあることは悲しいです。絶対に戦争はいやです。



あの頃を回想して

大塚君子

戦後五十年を迎え、あの頃を振り返ってみる時、育ち盛りだった私には、一番ひもじかった事が心の奥底に残り、忘れられない思いでの一つとなっています。

私の小学生時代を思い出してみると、どの学校にも「二宮金次郎（にのみやきんじろう）」の銅像や奉安殿があり、「勤勉実直（きんべんじっちょく）質実剛健（しつじつごうけん）」から「忠君愛国（ちゅうくんあいこく）」へと次第にエスカレートしていった軍国主義教育がなされ、戦後厳しく批判されましが、当時の私たちは無邪気に何の抵抗も無く学校生活になじんでいました。

学校の名称も「小学校」から「国民学校」に変わり、私たちも「少国民」としての厳しい教育を受けました。家庭も含めて私たちは「しつけ」と「べからず」に取り囲まれ、物資が不足すると共に「欲しがりません勝つまでは」とか「ぜいたくは敵だ！」と、我慢することを教えられ育てられました。

私は名古屋で生まれましたが、小学校のほとんどを浦和の第2付属で学びました。勉強も熱心でしたが、それ以上に学校農園、水田、芋掘りなど農作業の体験もしました。たんぼでヒルに吸い付かれ泣いた子の事や、袋に筒をつけてイナゴ捕りをした事、それを学校で佃煮にしたのが怖くて食べられなかった事、採れたお米を校庭で脱穀（だっこく）や精米をし、おにぎりにしてもらい食べたことなどもなつかしく思い出されます。

また鍛練（たんれん）のため、五、六年の体育では男子は武道、女子は薙刀（なぎなた）など週2回も取り入れられていました。

毎月一回神社の清掃や神国日本の児童として、兵隊さんの武運長久（ぶうんちょうきゅう）と戦勝を祈願し、参拝に行きました。

戦争も初期の頃は、物の無い時代でしたがいろいろな経験を通して、お国のために戦っている兵隊さんの事を思い、あまりつらいとは思いませんでした。

昭和十八年十二月に父が亡くなり、私たちは母の実家のある鳥羽へ引っ越しました。その頃名古屋でも疎開（そかい）が始まり、疎開先の無い児童は親元を離れて先生と一緒に田舎のお寺などに集団疎開をしました。その子ども達はとてもかわいそうだったようです。

私は女学校に通うようになりましたが、戦争も激しくなり、上級生の姉たちは近くの軍事工場で働いていました。私たちは農繁期になると、兵隊にとられ働き手の無い農家へお手伝いに行きました。おやつにおいもが出されると嬉しかったことが思い出されます。

昭和二十年、東京に大空襲があり、その後日本のあちこちに爆弾が落とされ、たくさんの都市が焼け野原になりました。

私は戦災にはあわなかったので、本当の恐ろしさは分かりませんが、一度だけ防空壕に逃げるとき、機銃掃射（きじゅうそうしゃ）のたまにもう少しで当たるところでした。また、学校で防空壕に避難している時、家の近くに爆弾が落とされた事を聞き、とても心配しました。でも私の家の反対側と知り、ほっとしましたが、その家の人の肉片が天井まで飛び散っていたと聞いた時は本当に怖かったです。

私の通っていた女学校も、終戦間近に焼けてしまいました。真っ赤に夜空をこがしたあの夜の光景は、一生忘れる事なく脳裏に焼き付いています。

間もなく終戦を知らされましたが、信じることがとてもできませんでした。

食料がますます手に入りにくくなり、父の服や母の着物が食料に変わり、おひなさままで食べ物と交換して食べてしまいました。特に終戦後の食料難は、戦時中よりひどくなり、母はどんなにか大変だったと思います。主

食は主に芋やカボチャのどろどろの汁か、すいとんなどでした。おなかがへるので、食べられる物は何でも食べました。カボチャやヒマワリの種、ぬかやふすまなど炒って食べました。芋の茎やカボチャの葉、タンポポ、アカザ、スベリヒユなど食べられる野の草も覚えました。芋の葉はぬるぬるとしてとても気持ち悪かったけどがまんして食べたこと、四歳の弟はまずくって食べられないとだだをこね、母に叱られ外へ出された悲しい記憶も残っています。

また芋の買い出しに、遠い知人の農家を尋ね、何キロもある山道を思いリュックを背負って歩き、終電車に乗り遅れて駅の近くの家に泊めていただいた事などが走馬灯のように次々と思い出されてきます。

今、日本は豊かになり物があふれぜいたくになり、平気で色々な物が捨てられていくのを見るにつけ、とても胸が痛みます。今でも色々な物がもったいなく捨てられない私です。

国のために死んでいった兵隊さん、空襲で命を失った多くの人々の犠牲の上に得たこの平和！　私たちが体験した苦労が、何物にも代えられない平和への強い願いとして、再びおろかな戦争を起こさないよう、次の世代へしっかりと伝えなければならないと思います。

発行の辞

わたしたちの国で、凄惨な地上戦が「おきなわ」の豊かな自然も壊しながら展開されてしまってから、丸まる五十年の歳月が流れてしまいました。「ヒロシマ」の生き地獄の瞬間も、「ナガサキ」の惨劇も、そして様々な想いで受け止められた一九四五年八月十五日も、半世紀以上も前のことになろうとしています。また、切り棄てられた国民・「シベリア抑留者」のことも、切り棄てられたままの国土・「北方領土」のことも、あきらかな「棄民」政策に翻弄された「満蒙開拓団」のことも忘れ去られようとしていますし、「南京大虐殺」の事実さえも隠されようとしています。しかし、事実としての体験をうかがえばうかがうほど、記録を読ませていただけばいただくほど、とめどもなく重く苦く辛いものを人間として感受せざるをえないほどの禍根を、その歴史の中に刻みつけられ、暮しの中に引き受けていかざるをえない、わたしたちは、いま、胸を張って、わたしたちの地域の、わたしたちの国の、そしてわたしたちの世界の、「へいわ」を誇ることができるでしょうか？

これまでに六回の「集い」を積み上げてきている私たちの実行委員会では、戦後五十年の「節目」を「切れ目」にしてしまわないこと、つまり「戦争」の責任を受け止め考えるのは今年かぎりにしましょうという雰囲気（世論）を絶対に創らないようにすること、むしろ今年の全国的な問題意識の盛り上がりをさらなる発展の契機として「戦争体験を語り継ぐ集い」を軸とした「真の平和を希求し、生きるいのちの尊厳を深く大切にしあえる」地域での取り組みを社会教育センターを拠点として拡げていくこと、そうした想いを会合を積み重ねながら練り上げてきています。

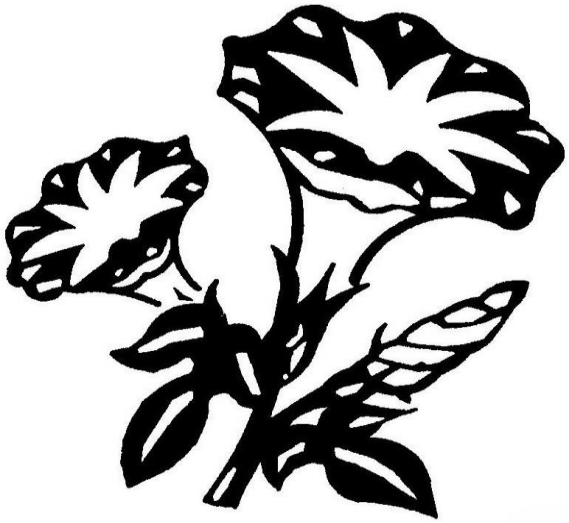
この「体験記録集」づくりでは、昨年はじめて「記録集」を編んだときよりも一まわり多くの方々に、貴重な（そして場合によっては辛すぎて記憶をたどりたくないという想いのこもった）「記録」を綴っていただくこと

ができました。さまざまな想いをおして、筆を執ってくださった方々に、この場をお借りして心からの敬意を表させていただきますとともに、わたしたちやわたしたちに続くまだ見ぬ世代の子どもたちのためにも、今後さらに多くの方々が「借り物でない自らの体験」を「日頃お使いになっておられる言葉や文字で」語り、綴り、伝えてくださることを切に願っております。

私たちの編んでいる「記録集」は、ささやかなそして見栄えもしないものではありますが、ほんとうに身近な地域の方々の体験の記録を積み上げていく（心の叫びに耳をそばだてていく）ことこそ、ちっぽけで遠回りな取り組みに見えて実は最も着実でゆるぎのない取り組みであるということに確信を持つことができるとすれば、今後もさらに積み上げられていくことでしょう。

「あなた」と「わたし」の、そしてわたしたちの、「誰もが安心して、生きいきと暮らせる」地域づくりのために。そして、『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』の中で、仲宗根政善先生がよびかけられた「戦争体験を風化させてはならない。」（「あとがき」角川文庫版、四四四頁より）という、「わたし」と「あなた」への心からのメッセージにお応えしていくために、も。

第七回「戦争体験を語り継ぐ集い」実行委員会一同



緑区民の戦時体験記録集（第二集）
－第７回戦争体験を語り継ぐ集い・資料－
編集責任者・・・第７回戦争体験を語り継ぐ集い実行委員会
印刷、発行・・・名古屋市緑社会教育センター
発行年月日・・・一九九五年七月一六日